談話室

この機に乗じて・・・・

米国サブプライムローン問題に端を発した経済危機は，リーマンブラザーズの破綻を皮切りに，世界中を巻き込みながら広がりつつあります。今回の出来事は，経済については素人である私の目から見ても尋常ではなく，経済システムの改善のみならず，人々の価値観に加え，生活スタイルそのものまで変えないと，解決の糸口は見いだせないのではないかと思えてなりません。木材に関連する合板や建機などの企業幹部と話していても，「とにかく今回は底が全く見えないから‥‥」と，これまでの不況とは違うということを敏感に感じ取られているもようです。

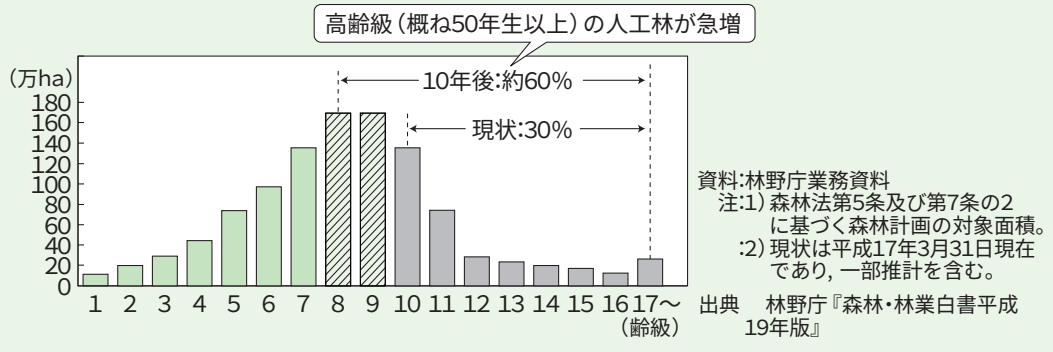
私は，京都府の「日吉町森林組合」という小さな森林組合の参事をしていますが，そうした社会情勢の中で，何と去る２月３日火曜日のＮＨＫ番組「プロフェッショナル仕事の流儀」に出演しました。そして，３日後の２月６日には，関西２府４県のみの放送ではありましたが，林業の世界では「道づくり名人」として有名な大阪の林業家「大橋慶三郎さん」の特集番組が流されました。同じ45分番組ですが，こちらは金曜日の夜８時というゴールデンタイムです。おそらく多くの人がごらんになって，「林業ってこんなことをやっているのか」とか「こんな人がいるのか」と感嘆されたことだろう思います。私のもとへも「給料はいくらでもいいから森林プランナーに雇ってくれ」という電話があったほどです。

こうしたことは一昔前では考えられず，私も，よもやテレビに出るなどとは想像すらしませんでした。これは，国民の多くが森林や林業に興味を抱くようになってきた，あるいは放映すれば興味を持って見てくれるとＮＨＫの人たちが考えた，ということに他なりません。言いかえると，人々の価値観や興味がお金一辺倒や環境原理主義みたいな偏ったものから，バランスのとれたものへと変わりつつあり，それは，新しい時代の胎動ではないかと私は見ています。

ところが，林業関係にはそうした変化の兆しはほとんど見えず，森林組合も

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。

我が国の人工林の齢級別面積



旧態依然とした経営意識のところが大半です。でも実は，森林資源の変化から，このままだと多くの組合の経営が立ちゆかなくなるのは時間の問題だと思われます。上図は「平成19年版 森林・林業白書」から抜粋したものですが，10年後に50年生以上の利用可能林分が倍増し，人工林の約60％にまで達するのです。

これは，これまで多くの森林組合が行ってきた除伐や枝打ち・伐り捨て間伐などの保育事業中心から，太い木を伐り出して収益を生む事業へと転換しなければならないことを意味し，同時に，額に汗した森林所有者の苦労が実ることをも意味します。しかし，太い木を伐り出すには林内へ機械を入れなければならず，それには路網が必要で，路網開設には一定区域の集約化が不可欠です。こうした仕事は，手仕事である保育事業とは全く違う知識と技術が要求され，一朝一夕にできるものではありません。ところが私の知る限り，それらに気づいている森林組合の経営者は多くありません。

私は，今回の経済危機の混乱の後，多くの企業や団体の経営が，ひょっとすると国そのものの運営意識までもが変わるかも知れないと期待しています。そうしないと，この国の将来や子供たちの未来が危ういと思っているからです。できるなら，この機に乗じて森林組合経営者も目を見開いて意識を変え，そのことによって，日本の森林が本当の意味で豊かになることを願ってやみません。

(日吉町森林組合 理事兼参事　湯浅　勲・ゆあさいさお**)**

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。